

熊本県立芦北高等学校 令和2年度(2020年度)学校評価表

<p>1 学校教育目標</p> <p>【教育目標】 「魅力ある人材を育成し、地域の信頼と期待に応える芦高教育の創造と実践」</p> <p>【目指す生徒像】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人の心の痛みがわかる生徒 ・さわやかな挨拶ができる生徒 ・夢に向かって努力する生徒【 Challenge for your Dream ! 】 <p>【教師の目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ア 生徒一人ひとりを理解し、個性を見つけ伸ばす教育を実践する。 イ 生徒・保護者・地域の期待を受け止め、目指す生徒像の実現に努める。 ウ 「人間力」を磨き、生徒が尊敬し保護者から信頼される教師を目指す。
--

<p>2 本年度の重点目標</p> <p>【重点目標】 ～「良い学校」に向けて～</p> <ul style="list-style-type: none"> ア すべての教育活動における「魅力ある人材の育成」の具現化 イ すべての校務における課題解決の推進 ウ 限られた時間内でのより効率的・効果的な教育活動・校務(事務)処理の推進 エ 掃除や整理整頓が行き届いたきれいな学校づくり <p>【教育方針】</p> <ul style="list-style-type: none"> ア 「主体的、対話的で深い学び」により、学力の確実な定着を図る。 イ ICTを活用した授業を推進し、より効果的な学習指導を実践する。 ウ 図書館活用と読書指導による、読む力、考える力、表現する力を育成する。 エ 教科の専門性を活かしたプロジェクト学習により、課題解決型学習を推進する。 オ 生活指導を充実させ、基本的生活習慣を確立させる。 カ 生活指導と教育相談の協調により、安心して過ごせる学校づくりを推進する。 キ 自己肯定感及び他者の個性を受け入れる心を醸成する。 ク 部活動を推進し、生徒の心と身体の鍛錬と活気溢れる学校生活を実現する。 ケ 自然との触れ合いや地域との交流をとおして、自然と郷土を愛し大切にすることを育成する。 コ グローバルな視点を持ち、新しい世界へチャレンジする人材を育成する。 サ キャリア教育の充実により、高い進路目標にチャレンジする意識を育成する。 シ 生徒会活動や学校農業クラブ活動、部活動、ボランティア活動等の特別活動に積極的に取り組む主体的な人材の育成を図る。 ス 地域に学び、学びを地域に返す、地域とともにある学校づくりを推進する。

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	特色ある学校づくり	魅力ある学科づくりの推進	平成2年度の3学科の入学者90名を超える令和3年度入学生を確保する。	中学校や地域との連携を更に深め、芦北高校の魅力を地域へ発信し、また、各科の特色を活かして生徒募集に繋げる。学校PR動画を制作する。	B	7月豪雨、コロナ感染症の影響を受け混乱した中で、農業科は地域と連携した取組や小・中学校との交流活動を行い、林業科は公務員合格や大学進学で好成績を収めた。福祉科は、介護福祉士の資格取得や外部講師の活用に力を入れた。ICTによる連携協定を結び、ドローン撮影での学校PR動画、スクールガイド2種類の刷新・ブログの更新など新たな情報発信ができた。生徒募集ではやや減少した。

	業務改善	校務における課題解決の推進	各校務分掌の最低1つは課題に取組みチームで協働して問題解決を進める分掌組織。	昨年度の反省をもとにそれぞれの校務分掌で課題解決の取組みを具現化する。町の支援事業を活用したレベルアップ事業と学科の専門性を活かした地域との連携を深める。学年・学科、分掌における個々の経営感覚を高める。	B	新型コロナ対策や豪雨水害による分散登校や休校など想定外の対応に追われたが教職員・生徒・保護者・地域の支援と協力により業務の正常化を図ることができた。芦北町のレベルアップ事業を活用したVR介護体験やオンライン講座など新たな取組を行い学科の専門性向上に繋がった。新しい生活様式に基づく業務改善が求められる。
	働き方改革	時間内での効率的・効果的な校務処理の推進	業務時間月平均40時間以内をめざした実勤務時間の短縮と情報伝達システムの有効活用。	長期休業日を除いて、年次有給休暇年間5日以上取得する。平日は、20時までには全員が退勤する。ICTを活用して会議時間を短縮する。	A	超過勤務時間は平均3.2時間で、前年比平均1.6時間の減少。年休取得は平均7.5日。専門講師による働き方改革職員研修を行い、業務のスマート化、時間短縮に繋がった。
	危機管理	不祥事防止の徹底	不祥事ゼロを目指し、地域から信頼される学校づくりを目指す。	月に2回、芦北高校不祥事防止確認事項を朝礼で読み上げ、不祥事防止意識を高める。定期考査や長期休業期間に職員研修を実施する。	B	不祥事防止確認事項の読み上げは、月平均1.5回を行った。職員研修は、月平均1回行い、うち不祥事防止に係る研修を3回実施した。
学力向上	授業力向上のための取り組み	授業の充実	校外の各種研究授業や講習会に年1回以上参加して、指導力の向上や技術の習得に繋げる。専門教育におけるTT授業の活用。	各教科で主体的対話的で深い学びを重視した授業改善を行い、わかる授業の実践に努める。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導力向上と技術の習得及び安全確保に配慮する。	B	全教科において教育課程研究協議会(オンライン)に参加し、新学習指導要領及び授業改善、評価等に関する研修を受けた。実技・実習を伴う教科・科目では複数の教師の協働による指導をすることができた。
	授業力向上のための取り組み	授業の充実	公開授業週間を年2回、研究授業を各教科年1回、授業評価を年2回実施する。各教室に設置している電子黒板機能付プロジェクトを有効活用する。	研究授業では、同一学科を対象に専門学科と普通教科で連携して実施し教科横断的な視点に立った取り組みを行う。生徒の授業評価を実施し、課題の分析による授業改善と電子黒板機能付きプロジェクト等のICTを活用した授業を展開する。	A	校内研究授業は当初の予定と変更した部分はあったが、年間を通して実施できた。芦北町の総合的な支援で導入した各教室の電子黒板と書画カメラを授業で積極的に活用できた。また、Chromebookの先行活用に積極的に取り組んでいただいた。
	「確かな学力」の定着	自ら学ぶ学習の奨励	生徒一人あたり年間10冊以上の読書量の確保を目指す。毎月1回、漢字テストを実施する。生徒一人あたり1時間以上の家庭学習量を確保する。	朝の10分間読書の充実を図る。月1回の漢字テストの実施と事前学習に力を入れる。家庭学習時間確保のため課題を工夫する。長期休業期間中、課題を出し学習させる。町の支援事業で導入したスタディサプリを学科・学年及び教科で活用する。	B	朝読書の時間を変更したことにより、年間の回数が減少した。再検討が必要である。漢字テストは、臨時休校により実施回数は少なかったが、学年が中心となり成果を上げ、基礎学力向上につながっている。長期休暇中の課題は各教科で計画的に出題されている。スタディサプリは進学ゼミや公務員指導で積極的に活用されている。
キャリア教育(進路指導)	進路目標の早期確立	進路情報の収集と活用	生徒の進路選択の情報源となる進路資料室の整備を推進する。生徒の利用率2割増を目指す。	細かな進路希望調査、生徒一人ひとりとの進路面談を通して、進路希望を具体的に把握し、必要な情報について拡充する。	B	コロナ禍により外部ガイダンスへの参加が出来ない中、ズーム等を用いた説明会への参加ができるように環境整備を推進することができた。3年内定者に対する就業前セミナーも実施し、意識を高めることができた。
		進路保障	2月末には、希望進路達成100%を目指す。全職員による面接指導の充実。	進路希望調査を基にした進路指導や企業求人開拓の実施、進学支援体制の確立や個別指導の充実を図る。	A	求人が前年度比較で3割の減になり厳しさが増す中であつたが就職も100%内定した。国家公務員一次突破率過去最高を達成。小論文や面接等の指導を、全職員で協力して行うことができた。
	資格取得の奨励	年間実施計画の提示と推進	生徒一人ひとりが進路実現に繋がる資格取得に2つ以上挑戦できる環境づくりを目指す。	各学科や学年、クラス、教科の協力のもと、資格試験の周知や勧誘を行い、資格取得の学習支援体制を確立する。	B	コロナの影響で検定試験の実施が見送られたものもある中で、各学科・学年の協力もあり、昨年度並みの成果が得られた。

生徒指導	健全な心身の育成	基本的な生活習慣の確立とコミュニケーション能力の育成	「人の心の痛みがわかる生徒」「夢に向かって努力する生徒」の育成を目指す。遅刻者の減少と整容指導の徹底を図る。さわやかな挨拶の励行と責任ある行動を促す。公共意識を向上させる。特別指導件数10件未満を目指す。	学校生活全般において、思いやりの心と責任ある行動を意識づけさせる。日々のあいさつ運動（登校指導）を実施し、職員が模範となって挨拶を遂行する。生徒会役員が主体となって月1回の全校集会を実施する。職員による服装容儀指導、授業前の整容指導を実施する。	A	働き方改革の一環として、12月からあいさつ運動（登校指導）の回数を減らした。また、コロナ感染症拡大防止のため、全校集会等が例年よりも実施できなかった。そんな中でも、先生方の普段からの丁寧なコミュニケーションや指導のおかげで、生徒は落ち着いた学校生活を送ることができた。※特別指導3件（1月末現在） 災害復旧活動や芦高祭等の学校行事、部活動、校外活動など活動制限があるにもかかわらず、生徒は前向きかつ主体的に取り組んでおり、その姿に感心した。一人ひとりが明るい未来を切り拓く力を発揮した。
	情操教育の推進	安全教育の理解と徹底	生徒の心に寄り添った丁寧な声かけ等を行う。スマートフォンやSNS等の情報モラル教育の充実を図る。薬物乱用防止教育の充実を図る。交通違反・交通事故0を目指す。校内・外での二輪車施錠率の向上を目指す。	クラス指導やLHR等を活用し講話・講習・講演会を通じた話し合いの場を設ける。関係機関と連携した情報安全教育の講演会を実施するとともに、スマートフォンの使い方、SNS等における情報モラルに関する教育を徹底する。登下校指導において交通ルールやマナーについて考えさせる。交通委員による二輪車施錠の呼びかけ。	B	薬物乱用防止・交通安全教育は感染防止を徹底して体育館で実施することができた。また、情報モラル教育や通学指導はリモートで実施することができた。しかし、SNSを通じたトラブルや交通マナーの苦情等については校内・外からも報告されており、継続して指導する必要がある。また、自転車のツーロックどころかワンロックさえしていない生徒が増えているため、今後の指導が課題である。
人権教育の推進	推進体制の確立と研修の充実	教職員の実践的指導力の向上	全職員が校外研修会へ1回以上参加し、意識向上と指導力向上を図る。	職員への研修案内と参加呼びかけを定期的に行い、全職員校外研修に参加する。LHR等での指導力向上に向けた事前研修の充実を図る。	B	コロナの影響で校外研修の多くが中止となり参加できなかった。校内研修は年間計画に従い実施することができた。LHRの事前研修は十分に行なうことができた。
	すべての教育活動を通じた取組の強化	課題を抱えた生徒への支援と対策	各校務分掌と連携を図り、生徒の実態を把握し、いつでも、どこでも、すぐに対応できる職員の体制作りを行う。	担任・学年会・教科会・特別支援教育・教育相談の各担当者との連携を図り、研修をとおして全職員の共通理解を深め実践力を強化する。	B	教育相談部に所属することで、特別な支援を必要とする生徒、様々な課題を抱えた生徒の情報収集ができ、人権教育の立場からの支援について考えることができた。
	命を大切に する心を育む 指導の充実	命の大切さを 実感させる教 育の推進	命を大切にし、自尊感情を高め、お互いを理解し合い、認め合う心を育てる。	全校集会等で命の大切さに関する全体講話を実施する。教育活動全体を通して全職員が自分の言葉で語り、生徒と共に互いの信頼関係を築く土台作りをする。	B	全校集会で校長講話を実施した。SNSは使い方によっては人の命を奪う場合もあることを、ビデオ等でその功罪について学ぶことができた。
いじめの防止等	いじめ根絶の啓発・推進	いじめを絶対に許さない学校づくり	人の痛みがわかる生徒の育成。いじめに関する問題行動の根絶を目指す。全クラスで生徒面談を学期1回以上行い、情報収集と共有に努める。	いじめ防止に関する講話を実施して、生命や人権を大切にすることを育む。「目指す生徒像」「いじめを許さない宣言文」を教室に掲示し、啓発に努める。	B	12月に人権週間を設けた。人権集会ではSNS上のトラブルによる仲間はずれ等、生徒に身近なテーマで考えさせることが出来た。いじめを許さない宣言を唱和することで生徒一人ひとりの自覚を促した。
	いじめの防止と早期発見	いじめ防止や早期発見・早期対応	心のアンケートを年3回実施して、いじめの実態を把握し、対策を早急に取る。いじめの把握においては、関係機関と連携を密に取り合い早期対応に取り組む。	心のアンケート結果を基に、実態把握に努める。（年3回のアンケート実施）いじめ防止等対策委員会を年3回実施し、外部専門家から指導・助言を仰ぎ、取組についての検証を行う。	A	各学期1回心のアンケートを実施し、いじめを早期に発見することができた。いじめ防止等対策委員会では専門委員の先生から指導助言をいただき、いじめ防止、仲間づくり等への示唆をいただくことができた。
教育相談	特別支援教育	支援対象生徒について早期の支援開始	保護者、中学校、職員から得た情報を迅速に集約する。生徒理解の職員研修等を学	「保護者の気づき」「中学校訪問記録」で新入生の実態を4月中旬までに把握する。「気づきメモ」週間、教科担当者会をふ	B	新入生の実態把握に努め、年度初めに生徒理解研修を行い、職員間での共通理解を行った。新入生の支援対象生徒については

			期に1回行い、全職員の共通理解を図る。保護者の理解を得て、支援を開始する。	まえ、個別の教育支援計画を作成し、生徒理解研修を実施する。		コーディネーターが個別の教育支援計画・指導計画を作成し、学年会等で検討し、その後の生徒理解研修に結びつけることができた。今後も各教科における学習評価の方法を工夫していきたい。
		支援対象生徒の進路保障	支援対象生徒（3年生）の進路決定100%を目指す。1・2年生の進級を目標に、あらゆる場面で支援を行う。	担任、進路指導部、教育相談部、関係機関と連携を取り、保護者の理解を得て進めていく。	B	進路指導部と協力し、支援対象の3年生については関係機関と連携を取りながら段階的に取り組むことができた。
	教育相談	生徒の実態把握と課題解決	欠席が続く生徒、その他精神面への支援が必要な生徒の課題解決を図る。職員が一人で抱え込まないための相談体制の充実を図る。	定期的に教育相談校内委員会を開催し情報交換を行う。スクールカウンセラーを活用し課題解決に向けた方策を検討する。必要に応じて医療機関や福祉事務所等と連携を図る。	B	今年度はスクールカウンセラー2人体制で豪雨災害後のケアやその他課題に対してカウンセリングを行い、必要に応じて医療機関等と連携を図った。教育相談校内委員会は定期的を実施しなかったが、担任間や学年会等で情報共有ができた。
地域連携 (コミュニティ・スクールなど)	コミュニティ・スクールをはじめとした地域連携の体制づくり	災害時の地域連携体制づくり	学校運営協議会を2回開催し、災害時における地域連携の基本計画を作成する。	町との連絡体制、地域住民の受入、避難所運営、地域合同防災訓練への参加等の検討。また、今年度は町の方針に基づき、コロナ感染対策を考えた避難所運営について検討する。	A	避難所運営マニュアルの見直し及び避難所開設における新型コロナ感染症対策マニュアルを製作した。7月豪雨災害もあり、学校と地域が連携した防災体制づくりが今後も必要である。
		平常時の地域連携体制づくり	学校運営協議会の1回を、平常時における地域連携に充て、具体的方策を協議する。	佐敷小・中学校及び芦北支援学校本校・佐敷分教室との交流活動、乙千屋地区住民の参加型交流活動の検討。	B	7月豪雨災害や台風襲来時に指定避難所として本校を開放した。近隣の学校や住民と情報交換し連携強化について検討した。
		芦北町芦北高校総合支援事業の有効活用	芦北高校総合支援事業を有効に活用する。	各事業の趣旨を踏まえ、十分な効果が上がる活用を実践する。特にレベルアップ事業の活用と、生徒の進路決定につながる活用に力を入れる。	B	電子黒板の導入はICT活用の促進と生徒のスキルアップに繋がっている。コロナ禍による修学旅行中止で予算変更を行ったが、地域連携事業は学科の特色を生かし有効活用できた。スタディサプリは、休業中でも個別指導に生かすことができた。町との連携協定を結び今後の人材育成に期待できる。

4 学校関係者評価

- (1) コロナ感染症・7月豪雨という二重の苦難の中、学校の授業再開等を一番に考え、公務員合格や大学進学、資格取得において好成績を収め、素晴らしい経営ができています。
- (2) オンライン講座等の新しい取り組みや働き方改革など大きな成果がでています。
- (3) 芦北高校に入学したいと思える特色ある取り組みや魅力を、ICT等を活用して情報発信していく。
- (4) 授業力向上のための研究授業が確実に実施されているが、生徒の学力向上に対する意欲がやや弱い。
- (5) 読書と漢字テストを併せて実施することにより基礎学力向上にも繋がる。
- (6) 先生方と生徒の努力の成果として、求人3割減の厳しい状況下で就職100%を達成したことは評価できる。
- (7) 進路指導には育友会等と連携し、先生方の動きやすい環境づくりや早めの企業と生徒への働きかけが必要。
- (8) 校外実習に臨む心構えが少し足りないように感じる。
- (9) 被災した中でも生徒の落ち着いた生活態度が日頃から見受けられ、アンケート結果からも生徒指導は適切に行われている。
- (10) コロナ禍にあって、スマートフォンやSNS等の情報モラル教育の充実を図る必要があると感じる。
- (11) 自分・相手を大事にして、いじめの種を植えるのは人の弱い心ということを理解させる。
- (12) 豪雨災害に見舞われた中に、主体的にボランティア活動や復旧に取り組む芦高生の姿は、大きな勇気を与えてくれた。

5 総合評価

- (1) 魅力ある人材の育成をめざした“良い学校づくり”を重点目標としコロナや豪雨災害への対応とともに、学校・保護者・地域が一体感をもって取り組み、「地域の信頼と期待に応えられる芦高教育の創造と実践」に繋がる教育活動ができた。
- (2) 芦北町の支援事業を活用したオンライン講座やタブレット授業など、新たなICT教育の取り組みは、学科の専門性の向上

や地域へのPRとなり、生徒募集においては昨年をやや下回るものの定員約7割の充足となった。

- (3) 生徒・保護者・職員ともに8割以上がA・Bの回答を得ることができ本校教育が好意的に受け止められている。
- (4) 働き方改革では、外部講師を招いた職員研修や会議の時間短縮など、年間平均超過勤務が32時間となり職員の意識改革、業務のスマート化に繋がっている。
- (5) 電子黒板によるICT教育の活用は、専門教科や普通教科など、それぞれの教科の特色を活かし、時には学科の枠を超えた横断的取組みも行われ、「わかりやすい授業」に結びついている。
- (6) Chrome BOOKの先行導入は、GIGAスクール構想でのICT教育を活かした授業改善と生徒の「主体的で深い学び」に繋がっている。
- (7) コロナや水害で高校総体、学校農業クラブ活動、修学旅行が中止・変更されたなかでも、リスクレベルの状況に応じた行事の変更・見直しができた。
- (8) 求人数が大幅に減少する中で、就職内定率100%を達成し、国家一般林業職の一次試験合格率は過去最高であった。公務員対応型のゼミやスタディサプリ等の継続的取組みの成果が出ている。
- (9) 人権教育に「皆的病学習のためのフィールドワーク」を行った。また、「心のアンケート」を実施したことで、いじめの早期発見に繋がり、いじめ対応・措置のための職員研修「スクールロイヤー活用事業」を取り入れた。
- (10) SCの加配により、被災した生徒及び保護者へのカウンセリングを実施することができた。
- (11) 町と連携し、豪雨災害での避難所運営マニュアルの見直しや、コロナ感染症対策マニュアル等の作成をする等、防災体制づくりができた。

6 次年度への課題・改善方策

- (1) コロナ感染症や豪雨災害の影響を受け、空き教室の活用や教室配置、時間割編成など、計画的に行い効果的学習に繋げる。
- (2) 芦北町の支援事業と共にChrome BOOKの活用やネット環境の整備などICT教育をさらに充実したものとし、魅力ある人材の育成と生徒募集につなげる。
- (3) 新学習指導要領に向けたR4年度教育課程の見直しと授業改善等の準備をしていく。
- (4) 働き方改革の側面からも各種行事や会議等を見直し、本当に効果的で必要性のあるものを残し、効率性を高めていく。学年会の効率化及び実施数の削減を通し、確保された時間を教材研究やクラス業務にあてる。
- (5) 文部科学省の通達による校内文書等における押印の省略や連絡手段のデジタル化を進めていく。
- (6) タブレットを活用した「Google classroom」での進路情報の設置や「進路のてびき」をデータ化するなど、進路業務の整理と効率化を推進する。また、オンラインを活用した校内外のガイダンスを実施し、進路指導に役立てる。
- (7) 高校魅力化に向けた学校パンフレットやYoutube動画の作成を早期に取りかかり、有効な学校PR活動を進めていく。
- (8) 生徒数の変化等も推測しながら今後の農場計画（規模・場所の有効活用）を進めていく。
- (9) コロナ対策から介護実習を校内代替とすることを視野に入れて、講師招聘等を検討し、計画・実施する。
- (10) SC、SSWの活用を積極的に行い、豪雨災害については7月前に生徒・職員に対してメンタル研修を実施する。